３．関係資料

(1)　平成30年度教育課程表

教科	科目	標準単位数	1年次 必履修	1年次 共通履修	2年次 必履修	2年次 共通履修	3年次 必履修	3年次 共通履修	3年次 自由選択	小計
国語	国語総合	4	5							5
	現代文B	4				2		2		4
	古典B	4				3				3
	現代文探究								2	0～2
	古典探究								4	0～4
	古典研究								2	0～2
	小論文研究								2	0～2
地理歴史	世界史A	2			2					2
	世界史B	4							4	0～4
	日本史A	2			2					2
	日本史B	4							4	0～4
	地理B	4							4	0～4
公民	現代社会	2	2							2
	倫理	2							2	0～2
	政治・経済	2							2	0～2
保健体育	体育	7～8	2		2		3			7
	保健	2	1		1					2
芸術	音楽Ⅰ	2	(2)							0～2
	美術Ⅰ	2	(2)							0～2
	書道Ⅰ	2	(2)							0～2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4							4
	コミュニケーション英語Ⅱ	4				4				4
	ＯＣＰＤⅠ			2						2
	ＯＣＰＤⅡ					2				2
	Ｒｅａｄｉｎｇ Ｓｋｉｌｌｓ							4		4
	Ｗｒｉｔｉｎｇ Ｓｋｉｌｌｓ							2		2
	英語構文探究								2	0～2
	英語構文研究								2	0～2
	Ｐｒａｃｔｉｃａｌ Ｅｎｇｌｉｓｈ								2	0～2
家庭	家庭基礎	2			2					2
	フードデザイン								2	0～2
普通教科の科目計			18		20		11			49～
理数	理数数学Ⅰ		6							6
	理数数学Ⅱ				4					4
	理数数学特論					2				2
	理数物理		2			(3)			4	2～6
	理数化学		2			(3)			4	2～6
	理数生物		2			(3)			4	2～6
	理数地学					(3)			4	0～4
	課題研究				0					0
	理数数学Ⅲ							3		3
	理数数学探究								4	0～4
	理数数学研究								2	0～2
	理数物理探究								4	0～4
	理数化学探究								4	0～4
	理数生物探究								4	0～4
	理数地学探究								4	0～4
	理数物理研究								2	0～2
	理数化学研究								2	0～2
	理数生物研究								2	0～2
	理数地学研究								2	0～2
	理数情報		2							2
理数科目の科目計		25	14		12		3			29～
サイエンス リテラシー	サイエンス リテラシーⅠ		2							2
	サイエンス リテラシーⅡ				(2)					0～2
	サイエンス リテラシーⅢ								2	0～2
	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ ｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅡ				(2)					0～2
	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ ｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅢ								2	0～2
総合的な学習の時間		3～6	0		0		0			0
ホームルーム活動		3	1		1		1			3
合計			35		35		15		10～20	95～105

備考

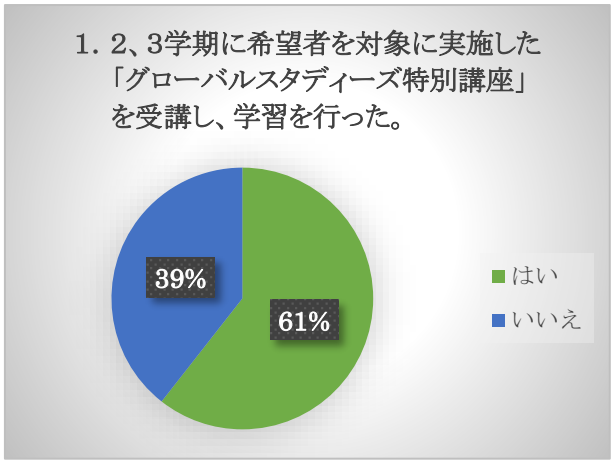
○「ｻｲｴﾝｽ ﾘﾃﾗｼｰ」とは、課題研究型の授業を行う学校設定教科である
○1年次の現代社会は、「ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ ｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅠ」の内容を含む
○1年次の芸術は、「音楽Ⅰ」、「美術Ⅰ」、「書道Ⅰ」から1科目選択して履修する
○2年次の理数理科は、「理数物理」、「理数化学」、「理数生物」、「理数地学」から2科目選択して履修する
○3年次の「理数数学Ⅲ」は、進路別にα、β、γの授業クラスに分かれる
○「理数数学Ⅰ」の履修をもって、「数学Ⅰ」の履修の全部に替える
○1年次の「理数物理」、「理数化学」、「理数生物」の履修をもって、それぞれ「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」の履修の全部に替える
○「理数情報」の履修をもって、「情報の科学」の履修の全部に替える
○「ｻｲｴﾝｽ ﾘﾃﾗｼｰⅠ」の履修をもって、「総合的な学習の時間」の履修の全部に替える
○「ｻｲｴﾝｽ ﾘﾃﾗｼｰⅡ」または「ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ ｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞⅡ」の履修をもって、「課題研究」の履修の全部に替える

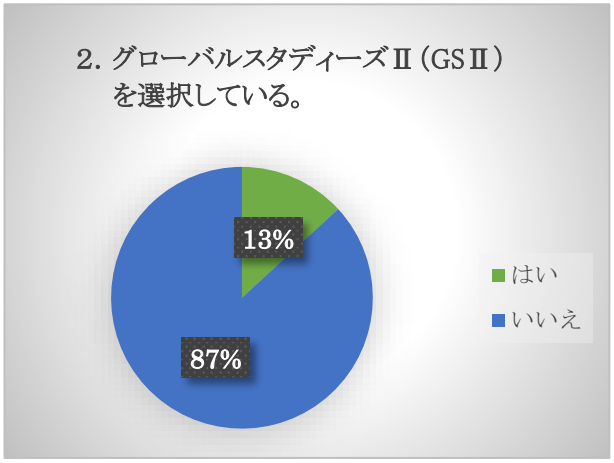
⑵　データ

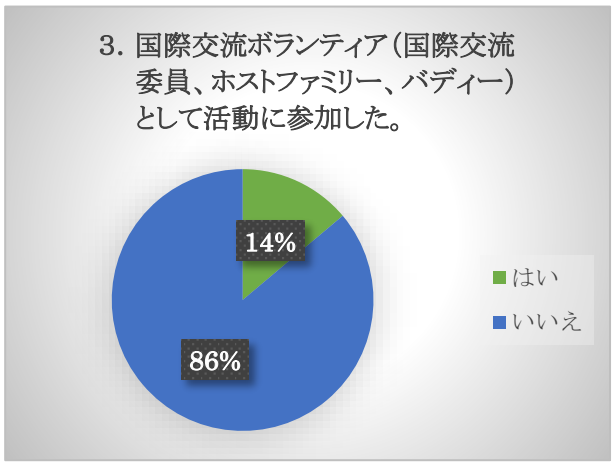
①　ＳＧＨ校内アンケート結果

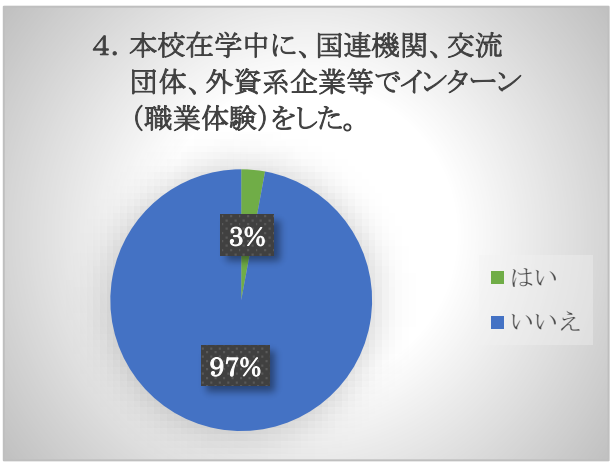
今年度の本校のＳＧＨ対象生徒（1 年次全員・2 年次 GS 選択者・3 年次 GS 選択者）にアンケートを実施した。（平成 31 年 2 月 12 日実施　回答 274）

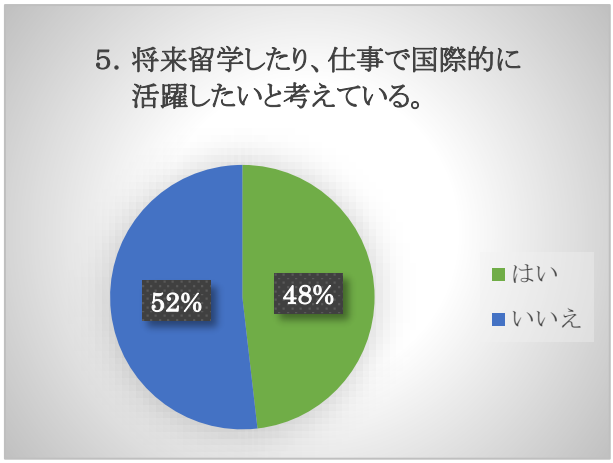
	質問内容	はい	いいえ
1	２、３学期に希望者を対象に実施した「グローバルスタディーズ特別講座」を受講し、学習を行った。	166	108
2	グローバルスタディーズⅡ（GSⅡ）を選択している。	36	238
3	国際交流ボランティア（国際交流委員、ホストファミリー、バディー）として活動に参加した。	38	236
4	本校在学中に、国連機関、交流団体、外資系企業等でインターン（職業体験）をした。	8	266
5	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えている。	132	142
6	将来、何らかの形（語学研修、ビジネス研修、芸術、スポーツ）で海外に留学してみたい。	137	137
7	海外の大学に進学したい。（国内大学との併願も含む）	22	252

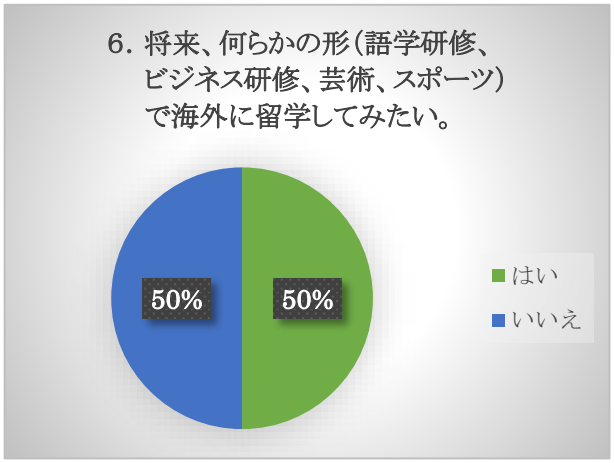


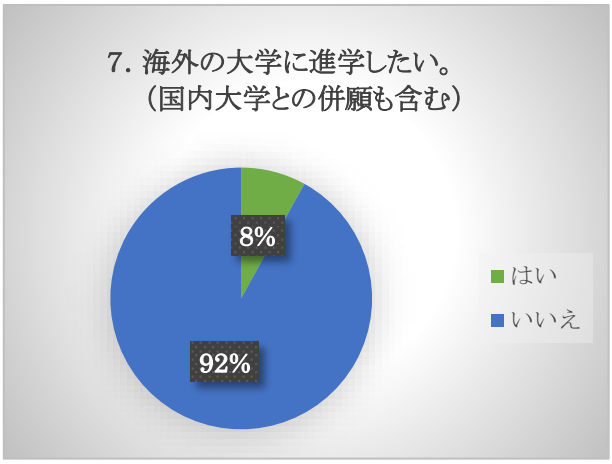






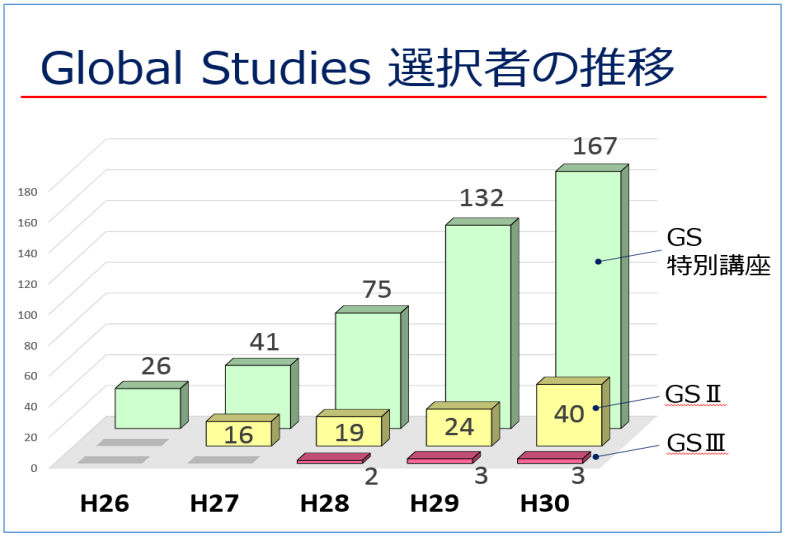






・半数以上の生徒が希望者を対象とした「グローバルスタディーズ特別講座」を受講しており、その割合は年々増加している。（昨年度比 11%増加）
・「グローバルスタディーズ特別講座」が「グローバルスタディーズⅡ」を学習する上での動機づけとなり、今年度の選択者の拡大に繋がった。

データが示す通り、本校の SGH としての活動・取組は着実に生徒に浸透してきた。生徒が更に「世界規模の課題」の現状や解決に向けた取組を学び、意欲的に課題研究を行うことができるよう、今後も引き続き指導していきたい。



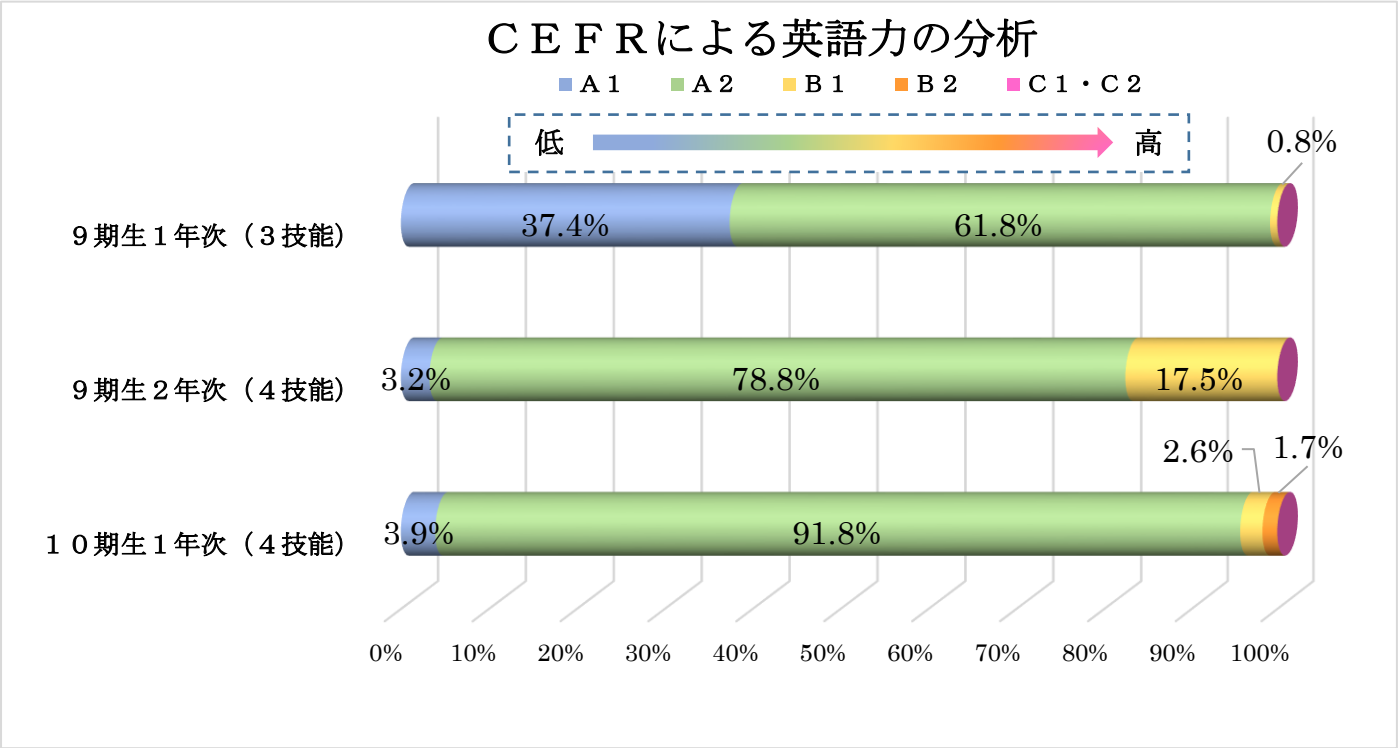
② 英語コミュニケーション力に関する状況

英語コミュニケーション力を測る外部指標として、平成 30 年 6 月に 1･2 年次生全員を対象に、また 3 年次生には希望者を対象に GTEC for Student を実施した。例年と違うところは、Speaking を含めた 4 技能を実施したこと、またオフィシャルスコアで結果がでるように曜日を設定して実施したことである。今年度の 1 年次生（10 期生）のスコアを見ると、ＣＥＦＲのＡ２レベル以上に相当する生徒の割合は 96.1%である。昨年度は 3 技能での実施ではあるが、比較すると 33.5%高くなっている。2 年次生(9 期生)を見ると、こちらも昨年度の 3 技能との比較ではあるが、Ａ２レベル以上の割合が、昨年度（1 年次）の 62.6%から 96.3%まで上昇している。

また 1 年次生でＢ１レベル以上のスコアを取得している生徒の割合は 4.3%で、2 年次生では 17.5%である。GTEC for Student 4 技能で満点（1280 点）に近いスコアを取得している生徒もおり、今後海外大学への進学も期待される。

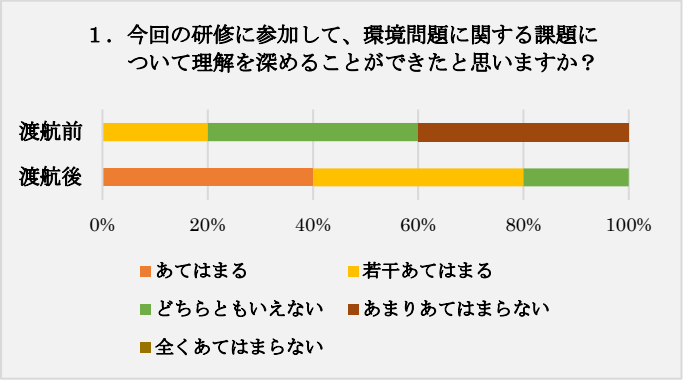
GTEC for Student（1･2 年次生）の結果

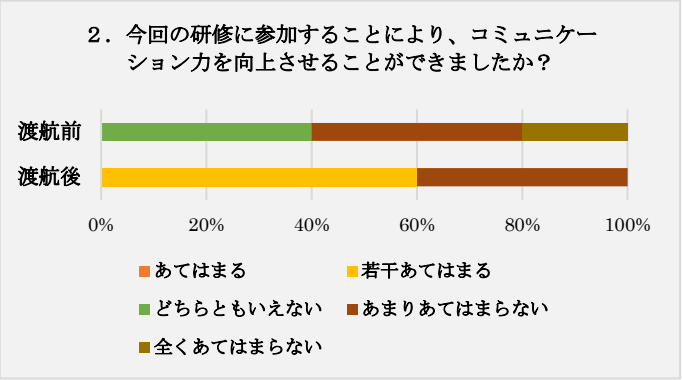
	受検者数	平均点	各 CEFR 換算レベルの人数				
			A1	A2	B1	B2	C1･C2
9 期生 1 年次（3 技能）	238 名	511.9 点（810 満点）	89 名	147 名	2 名	0 名	0 名
9 期生 2 年次（4 技能）	217 名	865.9 点（1280 満点）	7 名	171 名	38 名	0 名	0 名
10 期生 1 年次（4 技能）	231 名	820.8 点（1280 満点）	9 名	212 名	6 名	4 名	0 名

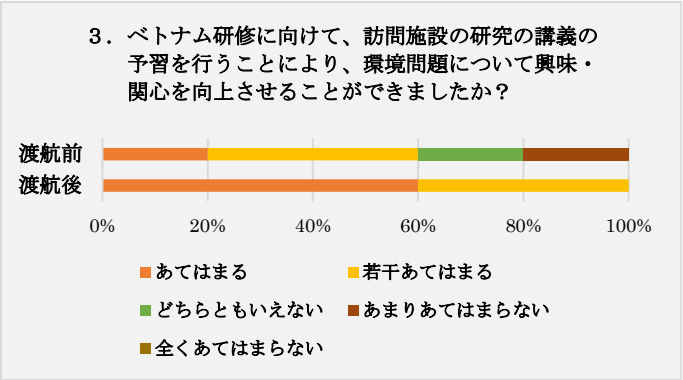


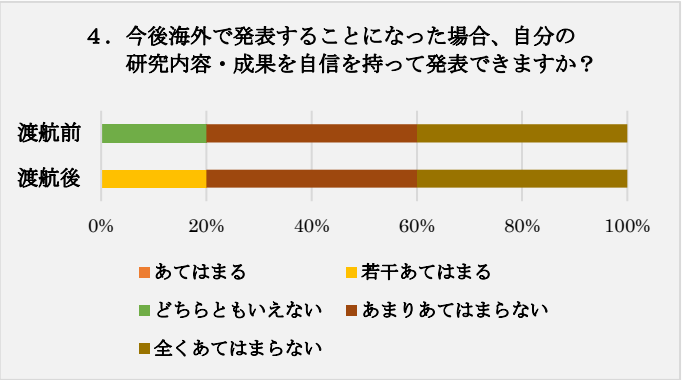
③　海外研修 渡航前・渡航後アンケート結果

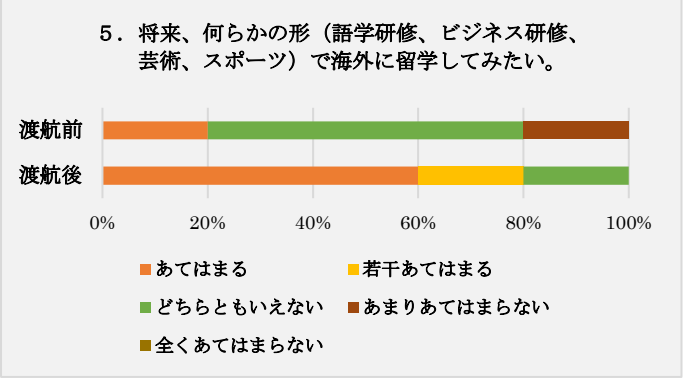
ＳＧＨベトナム環境問題調査

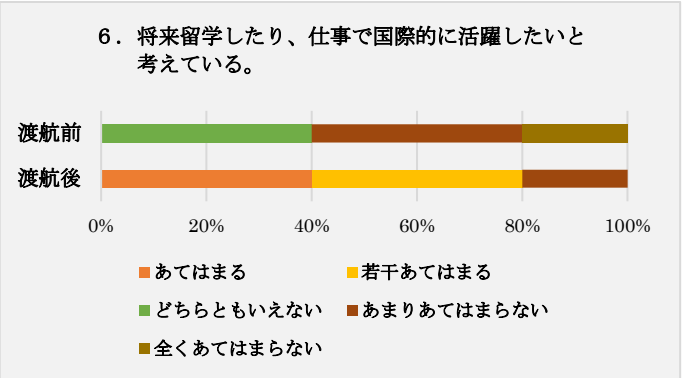












＜参加生徒の渡航後アンケートから＞

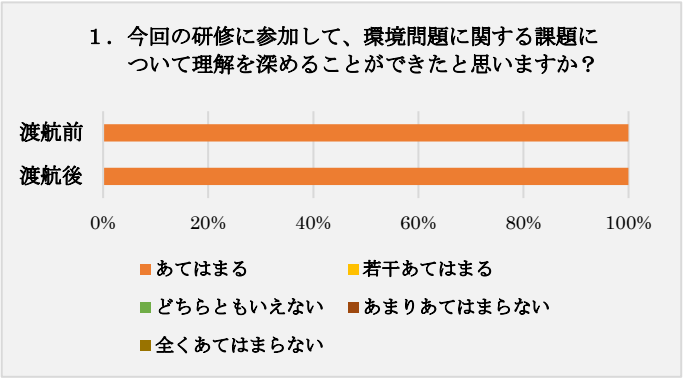
・渡航前と後で個人的に大きく変わったことは、英語の勉強に対するやる気と、英語でコミュニケーションをとることに対する意識だと思う。特に英語ができる海外の高校生と接することで、自分のリスニングや単語力、スピーキング能力の劣り具合を知った。一方で、劣り具合だけではなく、通じたときの感動を得ることができた。次は語学を目的とした留学に行きたいと思う。

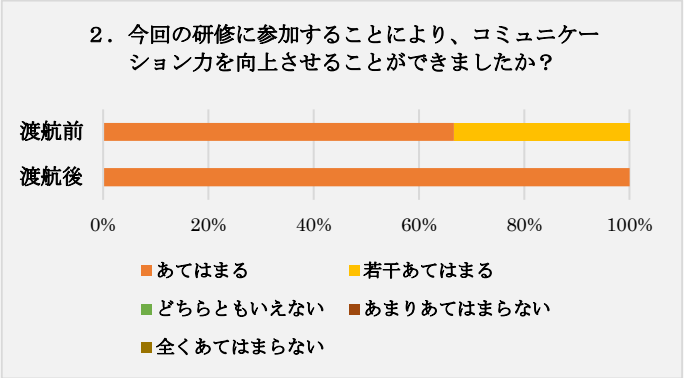
・ベトナムは全く環境の問題について考えられていないと思っていたが、そうではなくて、市民の中で自発的に分別やごみの減量に取り組んでいることを知ることができた。実際に行かないと聞けないことだったので良かった。

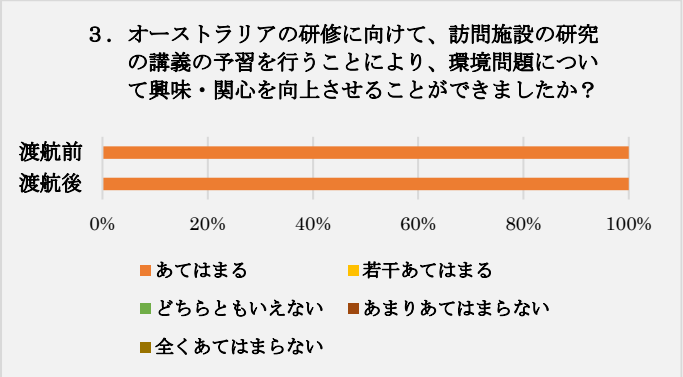
・学校以外の様々な世界に触れてみたくなり、外部の高校生と交流するプログラム等を調べて積極的に参加するようになった。初海外だったので、「言葉が通じなくてもコミュニケーションはとれる」と海外へのハードルが下がった。また、もっと海外の人と話せるようになりたいと思い、英語の勉強に意欲的になれた。

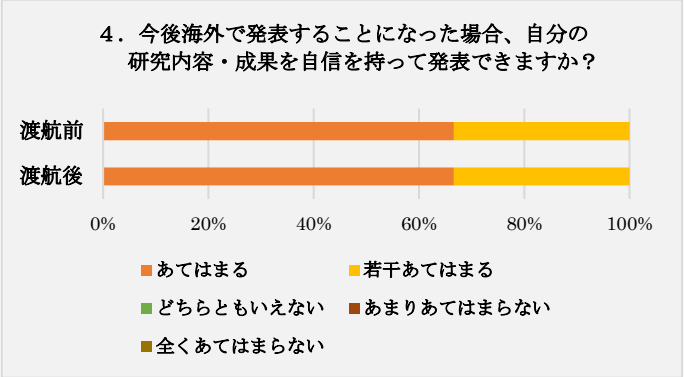
・現地の方とコミュニケーションがとれるか、高校生とディスカッションができるかなど、渡航前は不安ばかりだった。結局コミュニケーション、ディスカッションはうまくできなかったので、心配しても仕方がなかったなと思った。また、実際に現地を見て、想像していたよりもゴミの問題がひどく、自分の恵まれた環境に改めて気づくことができた。

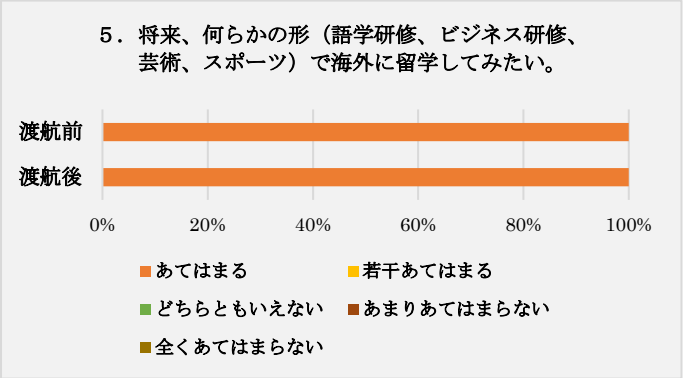
ＳＧＨオーストラリアイマージョン実習

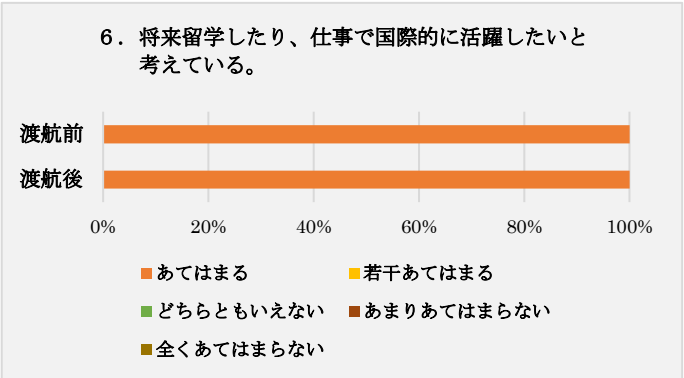












＜参加生徒の渡航後アンケートから＞

・オーストラリアについての知識は多少あったものの、実際に自分の目で見てみると本当に広大で日本に比べ、はるかに動物と人の関わりが密接であることが分かった。ＱＵの獣医学部はまさに「最先端」という印象だった。農業国であるためか犬・猫用のシステムの他に馬・牛・羊など家畜対応の医療システム、コアラ・ワラビーなど特有の動物の保護システム、獣医師志望者の教育システムは群を抜いていて圧倒された。ホームステイ先でも感じたことだが、ＱＵのレベルまで自分を高めたいのだとしたら、英語を中心として、幅広い分野（社会・環境問題）も力を入れて勉強しないといけないと思った。本当に貴重な経験をした。

・非常に充実した４日間だった。英語で、オーストラリアでしか学べない動物のことをたくさん学べた。ホームステイをとても楽しみにしていたが、英語でのコミュニケーションに困ることもなく、積極的に話しかけられた。もう一度、そしてもっと長い期間行きたい。

・自分の英語力がオーストラリアのなまりに近くなったと感じている。確かに、自分の言いたいことはそのまま伝えることはできるが、相手の言っていることが 100%は分からなかった。それは、オーストラリア独自の発音の仕方があると思った。

ＳＧＨ　ベトナム環境問題調査　報告書

１年次生徒

１．事前学習での横浜市内フィールドワーク

①　鶴見焼却工場

ごみが一時的に廃棄されているごみピットには多くのごみの種類があり、それによって燃えやすさが異なる。適当にごみを焼却炉に入れると燃えやすいごみは爆発するように燃え、逆に燃えにくいごみは焼却炉の火を消してしまう恐れもある。そこで焼却場では集積させたごみをクレーンで撹拌しながら、ベテラン職員の知識とノウハウでタイミングや量を微妙にコントロールし焼却物の調整を行っている。

その他、ダイオキシンを発生させないようにゴミを850～900℃の高温で処理する「焼却炉」、有害なガスを除去する「バグフィルタ」、焼却熱を発電に利用するための「蒸気タービン発電機」などを見学した。

②　西谷浄水場

日本が特許を持っている凝集剤「ポリ塩化アルミニウム（PAC）」を使って、実際に水の中の浮遊物が塊（フロック）になっていく様子を実験で確かめた。

西谷浄水場では、大部分の水を自然流下方式という高低差を利用して、電気を使わずに送水をしている。当日は、施設を歩いて回り、相模湖水系の原水が届く着水井から、実習で学んだPACが使われている沈殿池、ろ過池、配水池などを順番に見学した。

③　南本牧廃棄物最終処分場

灰や工場から出た不燃ごみを埋立地に捨てていた。可燃ごみは、焼却場で灰にして体積を減らすことで延命化を図っていた。また埋め立て後の土地の活用も考えられていた。海水を汚染しないように埋立地の仕切りを二重にするなど対策を行っていた。費用が高いことが課題として挙げられていた。

２．ベトナム フエ市での水道施設視察

①　HueWACO（フエ市の水道局）

25万㎥/日の供給量を誇るフエ地域の水道局で、地域の人口118万人のうち82％の人に水を供給している。研修前は、ベトナムでは清潔な水へのアクセスが難しいのではと考えていたが、実際のフエ市の水道は横浜市水道局が技術支援を行っているため、近代化が進んでいた。438か所に設置された装置で水圧や水質の管理、使用量などを管理していてWebサイトにアクセスすることで住民が使用量や料金も確認できる

②　Quang Te 2 浄水場

水の供給量の40％以上をまかなうフエ地域最大の浄水場で、二つの浄水設備を有する。一つ目は横浜の西谷浄水場にならったコンピュータ制御された新しい濾過方法を取り入れていて、水の供給量は3万㎥/日。二つ目はベトナム独自に開発された濾過方法で一つ目より電力を使わない物理法則を生かした仕組みがされていて、供給量は5万5000㎥/日。当日は、浄水システムの説明と、実際の浄水施設の見学を行った。

③　Van Nien 取水場

川沿いの地下水をくみ上げて浄水場に送っていた。西谷浄水場と違い、組み上げた原水をためる水槽には金魚が飼われていた。これはFish Checkerと呼ばれ、水質の異常を発見するための第一段階の検査として使われていた。

３．ベトナム ダナン市での廃棄物処理状況視察

①　Binh Minh幼稚園（リサイクルの取組）

この幼稚園では、ペットボトルや紙パックで子供たちが遊べる人形を作ったり、バイクのヘルメットで鉢植えを作ったりしていた。不要になったものを子供たちのおもちゃや、部屋の装飾に作り変えて活用していた。この活動は市のモデルケースになっている。不用品は各家庭から提供してもらっているそうだ。

②　Hai Chau地区（行政会長さんの家での聞き取り）

ダナンでは家庭ごとに1日1回のごみ回収が行われている。分別のシステムはないが、この地区をはじめとする数地区では資源物の自主的なリサイクル活動が行われている。今年に入りゴミのまとめ方を袋からゴミ箱へ変えたことで深刻な問題のひとつとされていた地域全体の袋の消費量が大幅に減少したそうだ。

次にレストランの店長から、飲食店のごみ処理に関する話を聞いた。飲食店では家庭より多くのごみが発生するため、環境会社と別契約をしている。多く出てしまった有機ゴミは廃棄せず酪農家に譲るなどの工夫をしている。

③　Thanh Khe地区（女性連合会への聞き取り）

Thanh Khe地区はダナン市の中で特にリサイクルが進んでいる。家庭の女性を中心としたごみの分別収集の仕組みが整いつつある。活動にあたり、当初は一軒一軒をまわって協力を求めていたそうだ。現在ではほとんどの家庭が協力的なものの、一部の家庭ではいまだ理解を得られていない。また、この地区外ではこのような地域をあげてのリサイクル活動は行われていない。ベトナムでは「分別しないこと」が常識だ。浸透させるにはリサイクルの明確な必要性を多くの人に知ってもらうことが大切である。

④　URENCO事務所（職員への聞き取り）

私たちは、地域で回収したごみを集め圧縮する施設を訪れた。ここで体積を減らすために圧縮されたごみは、コンテナでトラックによって最終処分場まで運ばれる。

ここには異臭やハエの発生などの環境問題もたくさんあったが、効率の悪さや労働環境の課題がみられた。圧縮しても最終処分場に運ばれるまでに体積が戻ってしまい、一度に運べる量が減るのだ。費用の課題としては、昔は

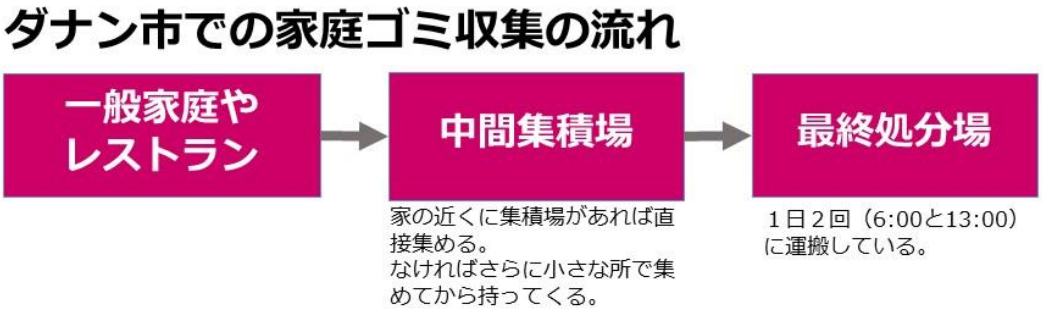
私企業として運営していたが、現在は自治体が母体となって運営しているため、労働者に与えられる給料が少なく、労働者が減っているといったものだ。

⑤　Khanh Son最終処分場

ごみは最終的には最終処分場に埋め立てられる。カンソン最終処分場は2006年から埋め立てを始めているが、ダナン市の急速な発展により、現在1日1,000トンの埋め立てを行っており、2019年には一杯になると言われている。10年少ししか持たないところに驚きを感じた。

焼却処理を行うことでごみは灰となり体積を減らすことができ、環境にも優しい。しかし、現在ダナン市では焼却処理を行わず、資源ごみ以外はそのまま埋めているという。現在の体制で経済が今後も成長していくと埋め立て場の敷地確保が困難となり公害問題も発生する。焼却処理の導入が一刻を争うと思った。

事前学習で鶴見焼却場を訪問した際に、1930～1940年代は横浜でもゴミは全て埋め立て処分されており、その後の都市の発展に対応するためにゴミの焼却処理や分別など始まったことを学んだ。今後のダナンのゴミ処理問題のヒントは、実は私たちが住む横浜のゴミ処理の歴史と変遷の中にあるのではないだろうか。



ＳＧＨ　オーストラリアイマージョン実習　報告書

1年次生徒

１．動物の保護、飼育

オーストラリアに到着し、まず一番初めに驚いたことは、日本では動物園でしか見ることのできないコアラやカンガルー、ワラビーなどが公共の公園、広場にいることだった。そして、カンガルー、ワラルー、ワラビーといったように、体の大きさによってそれぞれ呼び名が変わることを知り、不思議に思った。また、実際に現地に行ってみて感じたことは、オーストラリアには動物専用の救急車や様々な種類の動物を保護できる施設などがあり、人と同様に「動物福祉」が充実していることである。

動物専用の救急車

①　RSPCA

RSPCA（王立動物虐待防止協会）には様々な種類の動物がおり、ホームステイした家庭では RSPCA から猫を引き取って飼っていた。日本ではペットショップで動物を飼うことが多いが、オーストラリアにはペットショップがなく、保護施設から引き取るのが当たり前なのだと知った。また、オーストラリアでは動物に生きている動物を餌としてあげてはならないという法律があるため、生きている虫や動物の肉などを餌としてあげていたことに驚いた。

日本の動物愛護センター（いわゆる保健所）とオーストラリアのそれに相当する RSPCA の両方を訪問して感じたことは、主体として考える対象を人間とするのか動物にするのかで保護する施策が大きく変わってくるということである。

②　Wildlife Rescue Rehabilitation and Education Association

Wildlife Rescue Rehabilitation and Education Association（野生動物孤児飼育研修センター）では Trish さんという女性が一人で数多くの孤児となった動物を野生に戻すまで面倒を見ていた。無舗装の道が延々続く山の奥にある彼女の自宅が施設を兼ねており、屋内外でワラビーにエミュー、ハリモグラ、ワライカワセミなどの多くの動物が保護されていた。中にはおよそ 2 メートルはあるカンガルーや、人を襲うこともありうるイーグルもいた。犬・猫などの愛玩動物でない野生動物を保護している人々は、動物が自然界にスムーズに戻れるような工夫が多く見られ、確立されているように感じた。例えば Trish さんは鷲用の檻として、縦長で後方はトタンで囲み、前方は周りの山と調和する緑色のネットを使用していた。Trish さんが餌を前方に設置すると、鷲は前方に向かい、あたかもそのまま山へ飛び立っていくかのように滑空した。このようにすることで、鷲に自然な流れで飛行方法を思い出させ、野生に戻れるように練習させていた。動物保護のために大学で博士号を取り、30 年間無休でそれをこなし続けているその女性は「考えられないでしょうけど、こんな人生もあるって覚えておいて」と言って笑った。私は自分がやりたいことをやって日々を生きるのはなんて贅沢なことなのだろうと思った。そのための努力も勉強も惜しくないと思えるくらい充実した人生を送る人を目の当たりにして初めていろいろと考えさせられた。

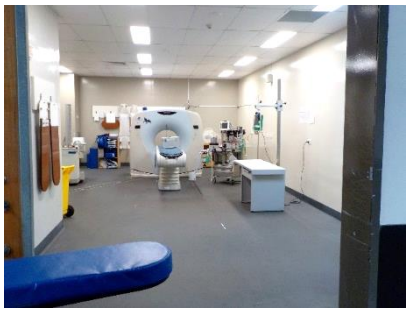
餌やり実習

③　海洋生物とプラスチック

オーストラリア日本野生動物保護教育財団の理事長である水野哲男氏によるセミナーで、海洋生物が人間の作り出したプラスチックによって大きな被害を受け、かなり深刻な問題となっていることを学んだ。例えば、絶滅危惧種に指定されているウミガメは、自然に分解されない廃棄されたビニール袋を餌であるクラゲと勘違いして食べてしまうが、口の中に突起状の返しのようなものが付いているので誤って飲み込んでしまったプラスチックを吐き出すことができずに喉でつまらせ、そのままなにも食べられずに餓死している。また、鳥は海で色のついているプラスチックを見つけ、雛にそのまま餌として与えてしまう。このように、人間がきちんと処理せずに廃棄した海洋ごみによって海洋生物が絶滅の危機にさらされていることを現地に行って初めて学んだ。いま私たちにできることは、この現状をより多くの人に伝え、各自の意識を変えていくことである。そして、オーストラリアの人々が海洋生物を守るために日常的にごみ拾いを行っているように、日本でも生物の多様性を守る行動に移していくべきだと感じた。

④　獣医学部の実習環境

日本では犬猫の保護施設のほとんどでエキゾチックアニマルと呼ばれる珍しい動物の治療や保護は難しいものになっているので、多種多様な動物に合わせて適切な保護や治療ができる環境が重要だと思った。しかし、水野先生のお話を聞くかぎり、日本の獣医学部では飼育されている動物の種類や数に限りがあり、充分な実習を行うことができないと感じた。オーストラリアでは学ぶことが細かく分けられており、動物の保護や治療、飼育法がとても専門的であることを教わった。日本の獣医学や保護に関する制度が遅れていると言われるのはこういうことだと実感した。クイーンズランド大学では麻酔科医やレントゲン技師などはっきり分かれていたように、日本でも動物についてもっと専門的に学べるようになるべきだと感じた。今回このように日本の外に出てみることで、日本にいるだけでは気づくことができなかった発見がたくさんあった。

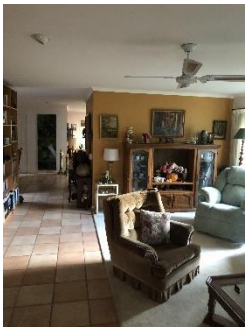


動物用の医療設備

２．ホームステイや英語によるコミュニケーション力

①　生活習慣

オーストラリアの文化は日本の文化とは遠く離れていると感じた。オーストラリアに住んでいる住民にもよると思うが、自分がホームステイした家庭では、家の中でも外でも土足だった。日本ではほとんどの家庭が玄関で靴を脱いでから家に上がるため、その文化に慣れていない自分は最初、土足のまま家に上がることにとても違和感を覚えた。また、日本では大抵、主食として米を食べるがオーストラリアではそうではない。日によって様々なものを食べる。それはパンだったり肉だったり様々だが、米を食べることはほとんどなかった。しかし、寿司屋はブリスベンだけでもたくさん見かけた。



ホームステイ先

②　言語

オーストラリアに到着して驚いたことは、アメリカ英語との発音の違いだった。アメリカ英語では「エイ」と発音する音が、オーストラリア英語では「アイ」になることが多い。例えば、日本語で「今日」を意味する、“today”という単語も、オーストラリア英語では「トゥデイ」ではなく、「トゥダイ」と発音する。このようなオーストラリア独特のアクセントや言い回しに加え、話すのが速い子どもの英語やインドなまりの英語など、聞き取るのに苦労し、戸惑いもあったが、話の流れから意味を推測し聞いていくうちに聞き取れるようになり、リスニング力も向上したと思う。また、滞在中は英語をあまり日本語に置き換えないように意識した。そして一見伝えるのが難しいと思っても、言い方を変えれば簡単な文法で話せることに気がついた。一人ひとりの意見が尊重され、まず最初に Yes か No で答えることが重要視されており、意見を求められたときにきちんと自分の考えを伝えることの大切さに改めて気がついた。

英語がうまく通じず、意思が伝えられなかったり、道に迷ったり、困ったことだらけで思考が停止し、途方に暮れたことも多かった。しかし、これらを乗り越えていく中で私の考え方が 180 度変わった。通じないならば何度も同じ単語の発音を変えて繰り返し伝えてみたり、初めて英語で街行く人に道を聞いてみたりした。模試でもテストでもない本物の「生きた英語」を必死で使い続けた 4 日間だった。母国語でない言語を話して、外国で暮らして、生きるために英語を使うという経験は本当に貴重なものだった。

③　ホームステイ

ホームステイ先にはホストマザーと 25 歳の中国人の留学生がいて、英語で日本語や中国語、漢字の意味を教えあったりし、ご飯を食べるときにそれぞれの国の文化について話したり、教会へ行ったりと、異文化に触れる機会がたくさんあった。一番違いを感じたのは学校に関してで、日本では高校から理系文系に別れて学ぶところが多いが、オーストラリアや中国では大学に入って学びたい分野を選択するということに驚いた。自分の国で普通だと思っていることが、他から見ればそうではないということを強く実感した。

最初に教会へ行くとホストファミリーから言われたとき、キリスト教ではない日本人の私が行くことに不安を覚えたが、オーストラリアは多国籍国家で教会にも様々な人種の人が訪れていて少し安心した。みんな分け隔てなく、フレンドリーに接してくれたのでいろんな人と英語でコミュニケーションをとることができた。人種や言葉による壁を作らず話しかけてくれたことが、私が積極的にコミュニケーションをとりたいと思うきっかけになった。

ホストマザーはラーメンが好きで日本のお菓子を渡すと喜んでくれた。ホストマザーの日本に対するイメージは、お寿司やラーメンなど食事が美味しく、休みが短くて働きすぎているというものであった。オーストラリアは女性も男性も多くの人が仕事をしているが、朝も早い分、夜も早く帰ってきて家族との時間を大切にしているという印象を受けた。

私はザンビア系の家庭にホームステイしたのだが、驚くほど楽しかった。こちらが必死に伝えようとすると、相手も同じくらい一生懸命になって聞き取ろうとしてくれた。ホストマザーの娘さんはショッピングに連れて行ってくれ、お気に入りだというチョコレートを買ってくれた。道中の車内でもうまく会話がかみ合わないことも多かったのに、英語で頑張って伝えようとしてくれてうれしいと言って、プレゼントしてくれた。食事を手掴みで食べて、と言われたときは驚いたが、実際にやってみてなぜ手掴みのほうが良いのか理解できた。ホームステイを通して、異文化に深く触れることができた。

３．今後この経験をどう活かしていくか

動物の保護、飼育に関して日本は遅れていると感じる点が多くあった。オーストラリアでは近所の人たちによって動物虐待に関する通報が入り、飼い主はその動物を強制的に取り上げられ、裁判にかけられる。動物虐待が大きな罪であり、犯罪であることが広く認識されている。日本においても、動物を飼っている人だけでなく、たくさんの人に「動物福祉」という概念を理解してもらえるような取組を考え、実行していくことが大切だと思った。この経験を無駄にしないよう、今後の研究発表などの機会にオーストラリアの野生動物保護の実態をできるだけ詳しく伝えていきたい。

研修に参加する前は獣医学に興味があったが、今回の研修を通して動物の保護や虐待から守る仕組みについても興味を持つようになった。病気やけがから助けるだけでなく、海洋生物をどうしたら守れるのかを環境と絡めて考えたり、動物を虐待から守れるような法律を作ったりするなど、動物を助ける方法はたくさんあるのだということを知り、視野が広がった。この経験を将来の自分の夢にも繋げていきたい。

一番印象に残ったのはクイーンズランド大学・獣医学部の設備であった。私は今まで日本の大学の獣医学部を見学することは多かったが、規模も授業も桁違いの最先端であった。2 年後あのレベルまで自分を高められるかは分からないが、今回感動した気持ちを糧にして英語と理数科目を主に強化して日々の勉強に取り組んでみようと思う。

バンクーバー姉妹校交流　報告書

2年次生徒

1年次生徒

１．事前学習の内容と気づき

７月下旬から９月にかけての約３か月間、事前学習を進めてきた。カナダの食文化や自然、気候、生活習慣などについて調べて英語でプレゼンテーションをした。カナダでのシチュエーションごとの対応についての学習も行った。たとえば入国審査での会話やホームステイ先でよく使う会話などだ。これらの会話は実際に行ったときにもとても役に立った。また、実際に現地で起こった失敗談の劇を見て、どのように対応すべきだったのかを話し合ったりした。横浜にあるJICAを訪問し、海外渡航についての説明を聞き、日本とバンクーバーの移民の歴史に関する資料を学習した。日本の魅力を伝え、日本に興味を持ってもらうにはどうすればいいかということを考えながらプレゼンテーションを作った。私はクイズ班の班長だったので、パフォーマンスの吟味を班員と徹底した。また、ダンスや合唱練習もほぼ毎回行い、特に合唱は音楽の先生を交えて練習することもあった。それらは完成に近づくにつれ自信につながった。聴衆のことを考えて何かを発表したことは今後の自分の成長にも繋がってくると思った。

２．プレゼンテーションの内容と気づき

姉妹校で日本の学校生活や文化についてのプレゼンテーションを行った。今回のプレゼンテーションでは実際のサイエンス生の１日についてや、和紙や歌舞伎などの日本の伝統的な文化など紹介したり、日本についてのクイズを出したりした。またソーラン節のパフォーマンスと「花は咲く」の合唱も行った。この発表は事前学習の中で一番時間をかけて準備してきたものだったが、実際に見に来てくれた姉妹校生徒を前にするととても緊張した。本番では、笑顔を意識して、相手に伝わりやすいように心がけて発表することができた。発表の中では問いかけを多くして聴衆を巻き込むように盛り上げることができたと思う。ソーラン節は楽しんでもらえたようでとてもうれしかった。また、合唱は英語でも歌ったので一緒に歌うことができて、とても良い思い出ができた。今回のプレゼンテーションで日本について他の国で紹介する難しさ、そして楽しさを感じとても良い経験となった。

３．姉妹校授業体験と気づき

姉妹校のDavid Thompson Secondary Schoolはバンクーバー市内の住宅地にある公立の総合教育学校で、8年生から12年生までの約1800名が在籍している。計2日間、姉妹校生徒にバディーとしてついてもらい授業体験・学校体験をした。私は物理、美術、歴史の授業を受けた。これらの体験を通して日本との違いを感じた。姉妹校生徒は積極的に授業に参加し、たくさんの量の宿題をこなしていて日本人も見習うべきだと感じた。また、授業の進め方も新しいと感じた。特に印象的だったのは社会のテストで、第二次世界大戦のことについてB5用紙に意見を書くというものだった。採点者は大変そうだが、より能動的に深く知っていないと解けないなと思った。様々な生徒がいて選択科目がたくさんあった。日本には無いようなダンス、心理学などの授業もあった。これらの体験から私は、授業を能動的に受けている姿勢や、日本と違い様々な新しい技術を取り入れているカナダの教育について学ぶことができた。今回の経験をこれから高校や大学での学習の姿勢に生かしていきたい。

４．コミュニケーション能力の育成における意識の変容

・気づけば入国審査で英語を話すことすら恐れていた自分は、間違えを恐れずに誰とでも英語でコミュケーションを取れるようになっていた。カナダは多国籍国家だから様々な肌の色の人、様々な宗教の人が混ざり合っていた。このような環境で暮らす中で視野の広い、異なる境遇の人のことも理解できる人間になりたいと思った。

・学校のテストなどで試される力と実際に海外の人と話すのに必要な力は、全くの別物なのだと思う。でも、日に日に少しずつだが、自分の思っていることを伝えられるようになった。言葉だけでなく、表情やジェスチャーを使ったからだ。コミュニケーションをとる手段は言葉だけではない、ということが、私が学んだことの一つである。そして、日本語と比べて意思の疎通が難しい分、思いが伝わったときの喜びは、何倍も大きかった。１週間、異国の地で過ごせたことは、大きな自信につながった。

・ホームステイを通して、私は自己主張の必要性を学習した。日本人の特徴でもある謙虚さももちろん大切で、重要な決断をするときには自己主張をすることも重要である。この謙虚さと自己主張のバランスが大切だということも学ぶことができた。

５．グローバルリーダー育成における意識の変容

・カナダの人々は、自分たちの歴史をとても大切にしていることが分かった。また、多くの異なった背景を持つ国民が国家を作っているので、話し合い、協力することが大切なのだと思った。

・カナダの生徒は、ルールや決まりに対して、当たり前の事と捉えず、「何のため？」と疑問を持ち、授業以外の様々な場面でも議論していた。色々なことに「なぜそうなのか？」と問いかけ、コミュニケーションをとる姿勢が根付いていると思う。

６．研修の成果

・この研修を通して一番大切だと思ったことは、気遣いや心配りである。カナダの人はとても親切で様々なところで優しさを感じた。それは日本人と変わらない。言語が違っても何とか生活はできた。もちろん言語が同じで言葉が分かれば良いが、それよりも相手を考えた行動、気遣いや心配りが所々に現れるような人ならどこへ行っても生きていけるような気がする。英語が上手く話せなくても、そういうところを忘れてはいけないなと思った。

・ホストシスターについては、平日にあった研修についてだけではなく、私が見たものに関して、「あれは何？」とか、「何のためにあるの？」とか聞いたときにほぼ 100％の確率で答えてくれた。最初はあまり気にならなかったが、あまりにもたくさんのことに答えてくれるので、「彼らはどうしてこんなに知っているのだろう」と思った。ずいぶん前に見たテレビで、「日本人は自分の国に関して知らないことが多い」という内容を言っていたが、まさにその通りだと思った。私は、自分のホストファミリーに、同じように自分の街のことを説明できないことに気づいた。ホストファミリーをすることになったら、何でも答えられるように勉強しておこうと思った。

・この研修を終えた今、バンクーバーはそう遠くはない場所のように思える。日本からバンクーバーまで飛行機でおよそ 9 時間。物理的にはものすごく遠いが、私が言っているのはそういう距離ではない。バンクーバーだけではなくて、海外は意外と近いと思えた。それが、この研修の一番の収穫である。ありきたりな言葉だが、自分の見えている世界が、とても広くなったように感じる。これからは、海外に行く、というだけではなく、日本国内でも、できる限りたくさんの経験をして、自分の視野をどんどん広げていきたい。

海のエコラベルから見る持続可能な漁業

1.持続可能な漁業と海のエコラベル

▸持続可能な漁業とは？
「現在および将来の世代にわたって最適利用が出来る様資源が維持されている漁業」
(水産庁資料よりまとめ)

この考え方を基に…

▸海のエコラベル
・持続可能な漁業で獲れた水産物を認証してエコブランド化する取り組み
・日本国内で流通しているのは主に右の2つの認証システム

2.日本国内での海のエコラベル

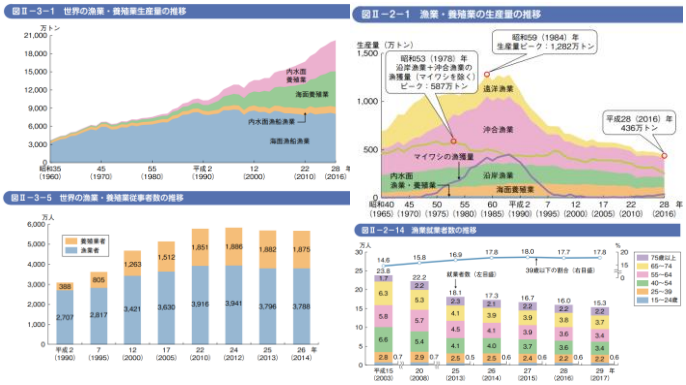
先行研究の中で海のエコラベルの認証を取得する為には以下のようなコストがかかり、漁業の競争力が低下することが指摘されている
・認証取得、更新の為の審査にかかる費用
・認証を取得する上で受け入れなければならない規制による損失

実際にMEL認証を取得した小笠原島漁業協同組合になぜ認証を取得したのかインタビューしてみました
(インタビュー日時：2018年7月7日
漁業就業支援フェアにおいて)

認証を取得した漁業：縦縄漁業(メカジキ漁)
動機：2020年東京オリンピックに向けた都の政策の一環として 小笠原のメカジキのPRのため
行っている漁獲規制：体長制限、漁具数の制限
・従来の資源保護方法がそのまま認められたこと ・認証取得の費用は都が負担 ・流通ルートがきちんと確保されている

このように条件がきちんと揃わなければ、中々認証取得に向けた動きは広まらないのではないか？
→海のエコラベルが普及する為には、一般消費者のエコラベル製品に対する強いニーズが必要なのではないか？

3.日本の漁業の現状



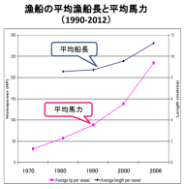
これらのグラフは(3)より引用

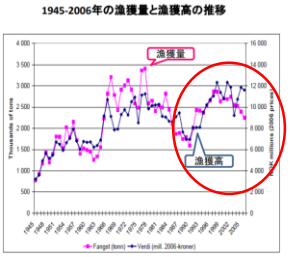
・世界的には漁業は成長産業であるが、日本においては衰退がみられる
・1994年に国連海洋法条約が発効したことを受けて、遠洋漁業の漁獲高が急激に減少している

4.日本に持続可能な漁業を導入する上で

▸成功例として主張されている
ノルウェー型の資源管理

(1).TAC/IVQ制度の導入による出口管理型漁業政策
(2).減船補助金を含めた漁業の徹底的な効率化、構造再編





上記3つのグラフはすべて(2)より引用

しかし、日本とノルウェーでは海中環境や水産物の消費先の違いなどもあり、一概にどちらの漁業管理が優れているとは言えない

5.まとめ

日本国内で海のエコラベルが普及していくには消費者の意識の大きな変革が必要ではないだろうか？また、日本型漁業とノルウェー型漁業には一長一短があり、それぞれの長所を取り入れていくべきではないだろうか。

参考文献

(1)「ノルウェー型漁業管理は日本漁業の救世主となり得るのか―出口管理に依存する資源管理の問題点―」片山知史、大海原宏
(2)「ノルウェーの漁業及び漁業管理について」　水産庁
(3)「平成29年度水産白書」　水産庁

ＧＳⅡ　中間発表プレゼンテーション

メディアの伝え方を考える

～新聞記事の比較を通して～

横浜サイエンスフロンティア高校
2年次生徒

持っている問題意識

■各メディアによって伝え方に差がある…のでは？
・中立に伝えることは難しいのか。

仮説

■ メディアの情報を聞いている人たちに正しい情報を提供し、見ている人たちに判断をゆだねるという意識を持てば中立・公正に伝えられる、どちらかに偏りすぎなくできる、と思います。

■ しかし！

■ 新聞記事の比較を通して私の理想は少し変わりました。

今回は焦点を新聞に絞りました。

■ 比較は政治の記事が主です。

■ 2018/7/25
■ 2016/11/10
■ 2014/7/2

メディアの役割って何だろう…？

■ 広告や広報の媒体
■ 社会的弱者などの意思表明の場
■ 一般市民に政治的判断の基準を提供する
政治を監視する　などなど

私は今回、メディアの役割は中立・公正な情報を伝えることに焦点を置きました。

そもそも中立とは？
新聞比較の上での定義を考えてみた。

ここからはインタビューさせていただいた、読売新聞の記者様のコメントや書籍を参考にしながら考察していきたいと思います。

中立とは嘘を交えず大事なことも大事でないことも等距離で眺めて（ここでいう視点は新聞記者の視点でいいと思います。）、自分は関わらないようにすること。

公正とは嘘を交えず、大事なことを、双方の言い分を聞いて、一方に肩入れしないこと。

だと考えた。

ここでの定義は新聞比較を行う上での定義です。といいますと、新聞の一面のレイアウトの違いを例に話しています。

今回は新聞社ごとの記事の書き方について比較してみました。

その前に表記について説明します。

新聞は大体こんな感じに場所が分かれており、場所によって重要度が変わってきます。

読売新聞

東京新聞

日本経済新聞

毎日新聞

産経新聞

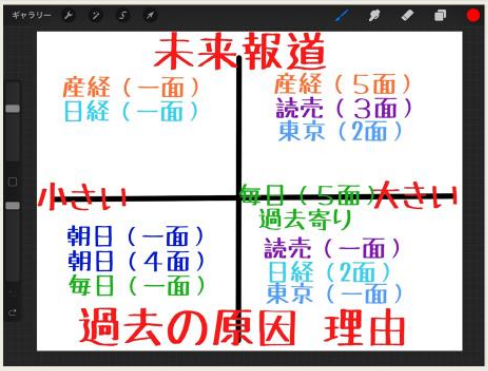
朝日新聞

見出し一覧

- 読売新聞　岸田氏　総裁選不出馬　自民　首相　議員票で優位
  岸田氏後継の目残す　総裁選不出馬
- 東京新聞　岸田氏不出馬、３選支持　首相　議員票の６割固める
  自民総裁選
- 日本経済新聞　安倍氏、総裁３選有力　岸田は出馬せず
  岸田氏　名門の重圧　総裁選不出馬　揺れた未の決断
- 毎日新聞　岸田氏　立候補せず　自民総裁選「首相を支持」
  岸田氏　勝算なく「撤退」　禅譲にかすかな望み
- 産経新聞　安倍氏の総裁３選濃厚　自民　岸田氏が不出馬表明
  迷った岸田氏　遅すぎた決断　首相は不信感　宏池会冷遇も
- 朝日新聞　岸田氏、総裁選不出馬　安倍氏を支持
  「非主流派」転落恐れ断念　岸田氏、勝機見いだせず

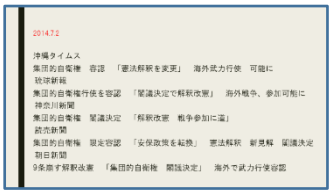
大きさを文字数で見る
左：一面　　右：中面　大きい記事：赤

- 読売新聞　約８５２文字　　約１３０８文字
- 東京新聞　約１６６１文字　　約１２９６文字
- 日本経済新聞　約６７１文字　　約１２９８文字
- 毎日新聞　約５０４文字　　約１０４０文字
- 産経新聞　約７１４文字　　約７８０文字
- 朝日新聞　約３８４文字　　約６７２文字



分析

✓ 大体の会社は未来報道と過去の原因・理由をバランスよく書いている。
✓ 一面に未来報道を書く場合には、少し謙虚に準トップの位置に書く。
（未来報道は嘘ではないがどちらかに肩入れしているようにもとれるため）
✓ 新聞社によっては、同じ内容でも重要度は違っている。しかし、中身はたとえ文字数が少なかったとしても、購読者が知りたい情報は載っているので、メディアの役割は、公正になっていると思う。


2014.7.2

沖縄タイムス
集団的自衛権　容認　「憲法解釈を変更」　海外武力行使　可能に
琉球新報
集団的自衛権行使を容認　「閣議決定で解釈改憲」　海外戦争、参加可能に
神奈川新聞
集団的自衛権　閣議決定　「解釈改憲　戦争参加に道」
読売新聞
集団的自衛権　現状容認　「安保政策を転換」　憲法解釈　新見解　閣議決定
朝日新聞
9条崩す解釈改憲　「集団的自衛権　閣議決定」　海外で武力行使容認

今回の比較研究を通して

- 私は初めは新聞によって書き方が変わってきたら、どれを信じればいいのかわからないのでそれぞれの特色を前面にだすのはよくないと単純に考えていました。

↓

- 新聞の社説を理解した上で、それぞれの新聞の特色ある記事を読めることは良いこと。と考えるようになりました。

提案

- 私は、各社の意見が食い違うほうが良いと思ったので、それを、十分に味わえるように、新聞販売店では、それぞれの社説などを紹介しながら、新聞を選んでもらうのが良いと思います。
- 例えば・・・

週に一度でも、トップ記事を寄せ集めたものを販売店で配れるようにしたり、
また、情報の正確性・妥当性を検証するために、第三者の立場から、トップ記事をファクトチェックしたものを発行することも良いと思います。

まとめ

- メディアにおける“中立”とは嘘を交えず大事なことも大事でないことも等距離で眺めて、自分は関わらないようにすること。“公正”とは嘘を交えず、大事なことを、双方の言い分を聞いて、一方に肩入れせず、より良い解決策を一緒に考えること
- メディアの役割は公正な情報を伝えること、そして政治を監視するという『第四の権力』という役割があること
- 今の日本の現状は、公正な記事は書けているが、それは、新聞社の意見を理解して真に公正な情報と言える

参考文献

- 桂敬一・田島泰彦・浜田純一 編著 『新聞学』 日本評論社 2009年
- 森達也『たった一つの「真実」なんてない』ちくまプリマー社　2014年
- 早川善治郎編著『概説マス・コミュニケーション』学文社2004年
- ホルヘ・ラモス『なぜジャーナリストは権力に挑む義務があるのか』TED講演（インターネット）
- 佐藤卓己『現代メディア史』岩波書店
- 池上彰『池上彰に聞くどうなってるの？ニッポンの新聞』
- 荻上チキ『すべての新聞は「偏って」いる　ホンネと数字のメディア論』２０１７年

インタビューに協力して下さった方

- 読売新聞の記者さん

ご清聴ありがとうございました

ＧＳⅡ　最終報告プレゼンテーション

動物実験に関する法整備の遅れについての思想的考察

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
2年次生徒

1. 背景

・生命科学技術の発展→ 動物実験件数が**増加**している（環境省, 2013）

・日本では欧米と比べ動物実験に関する法整備が**遅れている** (鍵山, 2010)

・日本と欧米とでは動物観に**差異**がある (環境省, 2013)

・高校の生物系部活動における研究活動

1. 背景

日本の法整備のどこが遅れているのか？

・当局による3つの免許制度

① 要件を満たす国家指定の実験実施場所の免許交付

② 動物実験実施者への免許交付

③ 実験計画の審査・免許交付

・実験動物専門の獣医師が動物福祉のコーディネーター⇔研究者本人

・外部検証(ピュアレビュー)

2. 目的・仮説

目的

日本における動物実験に関する法整備が遅れている原因の解明

仮説

日本の古代思想や文化を背景とする抵抗感が原因となっている

3. 検証方法

・テーマを以下の3個の項目に分け, 論文や書籍及びインターネットによる調査, 専門家へのインタビュー調査(横浜市立大学, 東京大学)を行った。

動物実験に関する法整備の遅れ

- a) 古代思想
- b) 日本と欧米の動物観
- c) 現代思想…教育・学問

4. 結果 a)古代思想

仏教・神道とアニミズム

人は動物を利用しなければ生きられない

①「不殺生戒(ふせっしょうかい)」
→動物殺傷の罪悪感

②「山川草木悉有仏性(さんせんそうもくしつうぶっしょう)」
→人間と動物とは生命的に平等

③「輪廻転生(りんねてんしょう)」
→ 人間と動物は生命的に連続

罪責・心の痛み

① 動物は神からの贈り物, 一部を送り返す
→「供犠の文化」

② 殺した霊を弔う, 事後少しずつ浄化
→「供養の文化」

4. 結果 b) 日本と欧米の動物観

		日本（東洋）	欧米（西洋）
位置関係		基本的には異なる世界に存在	同一の世界に存在
人と動物との関係	階層関係	人と生命的には平等。輪廻転生により、互いに生命的に連続的な存在。	人とは別の生命体、人の従属物。人のために存在し、人が責任をもって管理すべき存在。
対象動物		ペット等が中心	畜産動物や使役動物が中心
飼養技術		**稲作中心の文化**等を背景に、十分に発達・普及せず。	**牧畜中心の文化**等を背景に、発達・普及。
態度		**情緒的・放任的**	**合理的・科学的**

4. 結果 b) 日本と欧米の動物観

古代思想から現代思想へ

ピーター・シンガー(オーストラリア)『動物解放論』

第二次世界大戦後の日本の民主化

→ **思想の多様化**

4. 結果 c) 現代思想～教育

横浜市立大学における取り組み

1. 動物実験を扱う学生に対する倫理講習会への参加義務

   →法律、倫理、歴史、大学の取り組み等を学ぶ

2. 『実験動物の飼養及び保管並びに苦痛の軽減に関する基準』に基づく大学規定

4. 結果 c) 現代思想～学問 (東京大学)

「実験動物学」

原義

① 適正な実験結果

②動物実験における苦痛の最大限の軽減

の追究を目的とする学問分野

→

現在

- 人道的エンドポイント
- Five Freedoms
- 生物時間の考慮
- 苦痛の判断と基準
- 実験動物代替法 (培養, シミュレーション)

etc.

→実験動物に対する、「生物学的視点に基づく倫理面の配慮」

5. 考察

戦前：人と動物は生命的に平等で連続している, 生活上必要外の殺生に対する強い罪悪感

→アミニズムや仏教思想の影響・耕作中心の生活

戦後：動物を科学的にみる考え方, 動物実験を用いるという考え方

例: 実験動物学会(1951年設立), 薬理法(1960年)

↓

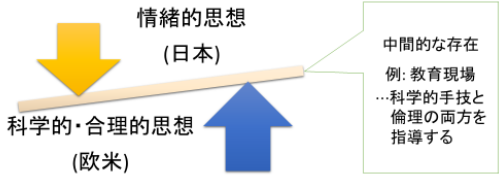
動物実験や殺生に対する文化的抵抗感・ディスカッションの少なさ

→動物実験とその安楽死法に関する法整備の遅れ

5. 考察

その反面, 現代の教育・実験動物学では…

科学的・合理的な視点からの倫理面配慮が増えてきている



ご清聴ありがとうございました

(インタビューに応じてくださった方々)

・久和　茂教授　東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻実験動物学研究室

・内山 秀穂教授と研究室の皆様　横浜市立大学大学院生命ナノシステム科学研究科生命環境システム科学専攻 国際総合科学部理学系生命環境コース再生発生学研究室

・青山 涼子さん　公益財団法人 実験動物中央研究所

(参考文献)

・ラッセル, バーチ著, 笠井憲雪訳『人道的実験技術の原理』アドスリー (1959, 日本語版, 2012)

・ピーターシンガー編『動物の権利』戸田清訳, 技術と人間 (1986)

・盛永審一郎・松島哲久 著『医学生のための生命倫理』丸善出版, 2012年

・八神健一 著『ノックアウトマウスの一生 ―実験マウスは医学に何をもたらしたか―』技術評論社, 2010年

・伊勢田哲治, 樋口雅 編『生命倫理学と功利主義』, ナカニシヤ出版 (2006. 05)

・松川俊夫 著『動物実験論争の哲学的意義』日本医学哲学・倫理学会誌『医学哲学 医学倫理』12巻 (15-27ページ), 1994年

・鎌山直子 著『我が国における動物実験指針の運用と課題』(2009)

・鎌山直子 著『動物実験の倫理指針と運用の実際』(2009)

・『動物の愛護及び福祉に関する法律』(2006年改)

・『実験動物の飼育及び保管及び苦痛の軽減に関する基準』(平成18年4月28日)

・クロード・ベルナール『実験医学序説』三浦岱栄訳, 岩波文庫, 1938年

・環境省自然環境局, 総務課, 動物愛護管理室『動物の愛護管理の社会的責任』

・亀山純生 著『日本の仏教思想における動物観』, 動物観研究会, 1999

・日本学術会議 編『実験動物の適正な保護に向けたガイドライン』(2006)

・『アリシニア百科大百科事典』プリタニカジャパン, 2014年出版, 「安楽死」

・H.エンゲルハート, H.ヨナス他著, 加藤尚武・飯田亘之編『バイオエシックスの基礎―欧米の「生命倫理」』第4部, 15「動物の生存権」 (205-220p)東海大学出版, 2007年

・横浜市立大学『実験動物の取り扱、講習会資料』, 2017年8月9日

・地球生物会議　http://alive-net.net/

・アニマル・ライン・センター　http://www.arcj.org/animals/animaltesting (最終閲覧日：2018年8月20日)

・Christel Vie Ensemble　http://christelfoundation.org/

・The American Society for the Prevention of Cruelty to Animals® (ASPCA®)　https://www.aspca.org/ (最終閲覧日：2018年8月20日)

・The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals (RSPCA)　https://www.rspca.org.uk/home

・Cruelty to Animals Act, 1876

・記事『ヒトとブタのキメラ」作製に成功, 移植用臓器不足は解消するか』(2017. 3. 9)　https://wired.jp/2017/03/09/first-human-pigchimera/

・ISEF　Guideline　https://student.societyforscience.org/vertebrate-animals　(日本語版)

・AVMA Guidelines for the Euthanasia of Animals: 2013 edition

・The Animal Welfare Act, US (1996)

・the British Cruelty to Animal Act (1876, revised in 1986)

・動物実験の歴史と思想(欧米)　https://blogs.yahoo.co.jp/tessai2005/36976719.html

・山崎恵美子『日本の動物愛護活動の歴史と現状』(2014)　http://erikvanrensburg.com/wp-content/uploads/2014/01/Article-April- 2014.pdf

・日本の動物愛護法　－目的・改正のポイント・海外との比較－　http://pedge.jp/reports/douaihou/

・日本における主な動物保護法制の歴史(ALIVE)　http://www.alive-net.net/law/wadai/law-history.html　(最終閲覧日：2018年8月20日)

・東北大学環境・安全委員会動物実験専門委員会『ニワトリ胚使用実験に関する考え方』,2017年3月16日

・AVMA Guidelines for the Euthanasia of Animals: 2013 edition

・仏教Web入門講座　https://true-buddhism.com/　(最終閲覧日：2018年12月16日)

・実験動物学会　https://www.jalas.jp/(最終閲覧日：2018年8月20日)

・実験動物学 久和研究室(東大)　http://www.vm.a.u-tokyo.ac.jp/jitsudo/(最終閲覧日：2018年8月20日)

・海外諸国の法律比較　http://www.med.akita-u.ac.jp/~doubutu/AWA.html

・環境省 資料『動物の愛護管理の歴史的変遷』(2003)・実験動物代替委員会　http://www.asas.or.jp/jsaae

How to Decrease Dog and Cat Euthanasia

Yokohama Science Frontier High School Satoshi Ito

Introduction

Japan has a large number of pets euthanized.

Reason

・Over capacities in the center.
・Prevent infections.

Fig. 1 An isolated cat family to concentrate on child-raising.

If this problem is solved

It will make community where people and animals can live happily.

Fig. 2 Simple operating table.

Hypothesis

Decrease the pets coming to the center.
Limit the pets circulating in markets.

Fig. 3 Culling machine

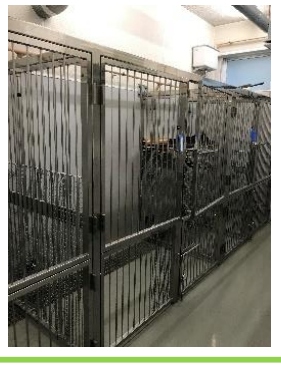


Fig. 4 No animals in cages

Method

1. Literature studies
2. Visiting three animal welfare centers and NPOs

Result

From literature studies:

The number of euthanasia is decreasing.

Government efforts and NPO

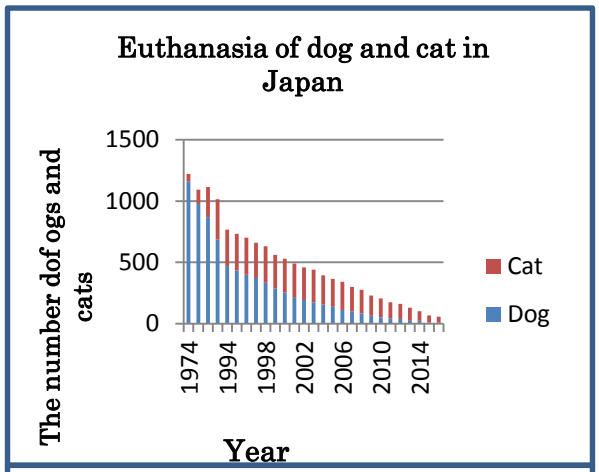


Fig. 5 The number of dog and cat euthanasia in Japan

・Animal welfare center is not well-known.
・Advanced countries for pets.
[Germany, Greece, Sweden]
・Instead of animal welfare centers these countries have 'Tierheims' (pet shelters).

From visiting centers and NPOs

・The number differs by each community.
・Adopted pets have a lower tendency to bite something.
・Stray dogs and stray cats with no owners.
・Owners are elderly people.

Future plan

・Interview by e-mail to each prefecture.
・Compare Japanese efforts with other countries.

Fig. 6 Active kittens

Acknowledgment

・Animal control center in Sapporo City
・Animal welfare center in Yokohama City
・Animal welfare center in Yokosuka City
・HOKKAIDO's Sippono-kai (NPO corporate body)

Making an Inclusive Society for Children with Developmental Disorders

Sara Kobae　Yokohama Science Frontier High School

Introduction

Developmental disorders are conditions that are marked by unbalanced development in childhood , such as, Asperger's syndrome, ADHD, LD etc. In Japan, the number of children with developmental disorders who attend normal classes at elementary and junior high school is increasing year by year.
To support such children there is a job called ***developmental support coordinator*** in Japan. The number of those coordinators has also been increasing year by year.

Problem

Children with developmental disorders

・They can't communicate with other students properly at school.
・Their parents wouldn't admit their children's disorders.
・Therefore, children with developmental disorders are often isolated in society, which causes secondary emerged comorbidity.

Coordinator

・They aren't recognized by parents.
・They are too busy teaching at school to focus on the jobs as coordinator.
・Low expertise.

Illustration

～Rukusu　Nakagawa～

Support facilities in Yokohama

・There are as many children as supporters.
・ They have also prepared individual support plans according to the growth of children.

Goal

To make an inclusive society for children with developmental disorders

①Along with schools, hospitals and families get support through coordinators.

・The coordinators should dedicate themselves more to their jobs.
・Japan should make a national qualification for the coordinators.

②People should create space where children feel comfortable.

・It is necessary to increase the number of facilities and staff.
・The coordinators need facilities.

Future Plan

・To examine the current state of the coordinator
・To consider how to make teachers more knowledgeable on developmental disorders

References

Ministry of education, Current status of special education Japan

A Consideration on How The Media Reports News

Hinako Murakami (Yokohama Science Frontier High School)

Awareness of the Problem

The ways of reporting the same news are different depending on mass communication companies.

Hypothesis

It is possible for the media to provide correct information and to be neutral and fair.

The Role of the Media

The media has three main roles.
1)Advertising and public relations
2)Raising awareness of social problems
3)Providing information on politics to the general public
The media's most important role is to provide as much accurate information as possible.

What is Important?

If a newspaper writes about 10 things, 2 are very important.

Regard both important things and unimportant things as equal.
For example, a newspaper writing as equal amount for all 10 things.

or

Listen to both sides and do not ignore the other side, thinking of both sides for a better solution.
For example, a newspaper writing more about the 2 important things.

This is more important.

Comparison of Newspaper Articles

Fig. 1 Yomiuri newspaper (Cover page)

Fig. 2 Yomiuri newspaper (Inner page)

- Cover page:
  There is a long article.
  It only tells past facts.
- Inner page:
  There is a long article.
  It analyzes what is going to happen.

Observation

	Cover page	Inner page
• Yomiuri Newspaper	852 Letters	1308 Letters
• Tokyo Newspaper	1661 Letters	1296 Letters
• Nihon Keizai Newspaper	671 Letters	1298Letters
• Mainichi Newspaper	504 letters	1040 Letters
• Sankei Newspaper	714 Letters	780 Letters
• Asahi Newspaper	384 Letters	672 Letters

Fig. 3 Comparison Of The Numbers Of The Letters

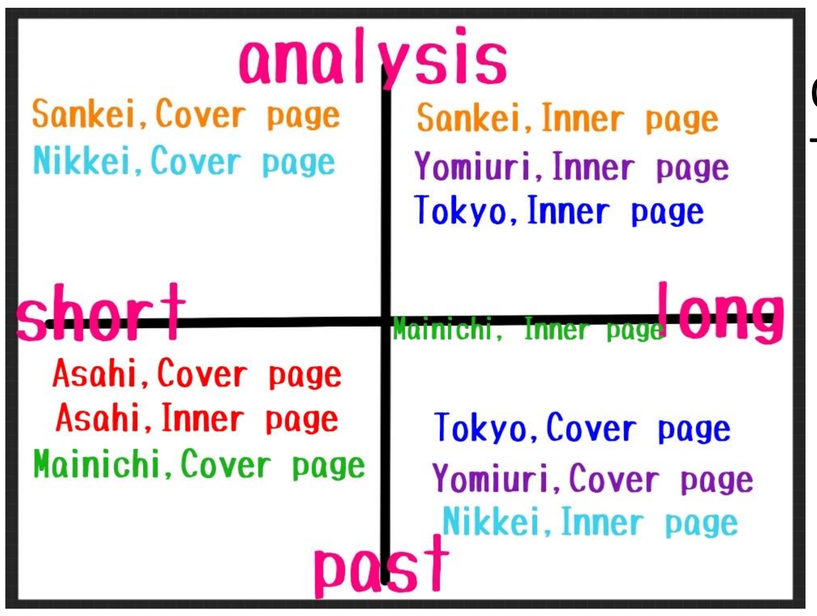


Fig.4

Features of The Newspapers

Most companies balance between writing facts and writing analyses of the past. When they write analyses on the cover page, they usually report the facts in the inner pages.

平成２６年度指定スーパーグローバルハイスクール
研究報告書・第５年次

平成３１年３月発行

発行者　横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
〒２３０－００４６　横浜市鶴見区小野町６
ＴＥＬ　０４５－５１１－３６５４　ＦＡＸ　０４５－５１１－３６４４